

*Unbeaten Tracks in Japan*の省略版の削除の目的と結果 ——ブラキストンとケプロンの イザベラ・バードへの批判をめぐって——

高 畑 美代子*

要旨：

*Unbeaten Tracks in Japan*は1878年に来日した英国の女性旅行家イザベラ・バードの日本旅行記である。初版は1880年にロンドンのジョン・マレー社から出版されて当時のベストセラーとなった。これに対して、トーマス・W・ブラキストンとホーレス・ケプロンはそれぞれの著書で、厳しくイザベラ・バードの記述を批判した。

1885年にジョン・マレー社から初版の半分以上を削除した省略新版（『日本奥地紀行』）が出たが、日本では、この省略版が作られたのは、彼らの厳しい批判に配慮したものとされてきた。

しかし、*Unbeaten Tracks in Japan*の省略版の計画は、初版刊行の前からあったことを証明する手紙が、ジョン・マレー社には保管されていた。また「統計を削除して冒険と旅行の本を作る」という省略版の目的の記述も見つかった。これらから彼らの批判と省略版の関係はあったのかという疑問が生じた。

そこで、本研究では彼らの批判箇所と省略版での削除箇所の関係を精査検討した。批判の対象となった記述が「覚書き」や「一般事項」などの説明的項目に含まれていて、一括して削除されたもののほかにも、個別の信書中であってほとんど残されているものや、数項目の事項のうちの一つを削除したものなどもあり、批判箇所への対応には一貫性がみられなかった。

また、省略版では関西旅行や居留地などの西洋人のよく行く地域や日本の近代化を記した部分が削除されたが、そのほとんどは彼らの指摘とは関係がなかった。これらのことから、省略版は、ブラキストンらの批判に配慮した結果であるとはいえないとの結論に至った。

省略の結果として、当初の目的どおりに未踏の地の冒険と旅行の本として改編されて、*Unbeaten Tracks in Japan*の題名に即した本になったといえる。

キーワード：イザベラ・バード、ブラキストンの批判、省略版、削除箇所

*弘前大学大学院地域社会研究科（後期博士課程）単位取得退学

The Deletions and their Aim with the Abridged Edition of *Unbeaten Tracks in Japan* —— Concerning Thomas W. Blakiston's and Horace Capron's Criticisms against Isabella Bird ——

Miyoko TAKAHATA*

Abstract：

Unbeaten Tracks in Japan is a record of Isabella Bird's travel in Japan in 1878. The first edition of the book was published by John Murray in London in 1880 and it became a bestseller at that time. Meantime, Horace Capron and Thomas Wright Blakiston expressed sharp criticisms against the book in their works.

In 1885, a new abridged edition, deleted by more than half from the first edition, was published by the same publisher. It has been said in Japan that Isabella Bird or her publisher, taking their severe criticisms into consideration, decided to make a new abridged edition.

A letter was found kept in John Murray's warehouse, however, which proved that an abridged edition had been planned even before the first edition was published. And also prescriptions were found underlying the planned abridgement of the book as making a book of collection of travels and adventures by leaving out statistics. From this, a doubt occurred if there be any relation between their criticisms and the abridgment. Hence I carefully compared the Blakiston's and Capron's criticisms with those parts which were abridged from the first edition. And I found that the deletions were made more or less independently of the criticisms—some objects of criticisms are included in the “memoranda” or “general articles” and those parts are deleted in a lump; some remaining in private correspondences almost intact; some only sporadically omitted, etc.

Also descriptions on travels to the western parts of Japan, or on the enclaves iterated by foreigners, or records on the modernizations of Japan were abbreviated, which, however, were irrelevant to their criticisms.

As a result of this abbreviation, which effect was what was aimed and so gave the title to the book, it was turned into an interesting book of travels in the unbeaten territories.

Key word : Isabella Bird ; Blakiston's criticisms ; Abridged edition ; Articles of deletion

*Regional Cultural Studies, Regional Studies (Doctoral Course) , Graduate School of Hirosaki University

はじめに

イザベラ・バード (1831-1904) は1878 (明治11) 年に日本を訪れた英国の女性旅行家である。その日本旅行記 *Unbeaten Tracks in Japan*¹⁾ は、1880年にロンドンのジョン・マレー (John Murray) 社から2巻本として出版された。ほぼ同時にニューヨークのパットナムズサンズ (Putnam's Sons) 社からもファクシミリ版が刊行されて、共に大きな反響を呼んだ²⁾。1885年に、ジョン・マレー社から初版を半分以下にした省略新版が出た。その後1世紀以上にわたり彼女の日本旅行記はこの省略版で読み継がれてきた³⁾。

日本では、この省略新版の削除は、函館の貿易商で動物学者のブラキストン [ブレイキストン] (Thomas Wright Blakiston [1832-91]、在日期間：1861-83) と開拓使教師頭取兼顧問であったホーレス・ケプロン (Horace Capron [1804-85]、在日期間：1872-5) のイザベラ・バードの日本旅行記に対する厳しい批判に対応したものだと言及がある。

ブラキストンは1883年に横浜の *Japan in Yezo*⁴⁾ において、北海道の生物、産業、外国人社会の記述を取り上げて批判した。

長谷川誠一は、ブラキストンの批判箇所と普及版の削除箇所の一致について「この *Japan in Yezo* における猛烈な批判を見た後で、対照のため *Unbeaten Tracks in Japan* を見た所、さらにまた驚くべき事を知った。見たのはTuttle版であるが、ブラキストンの攻撃した箇所、函館における外国人社会とバード女史の情報源、札幌について、蝦夷地の土壌についての記事は何処にも見当たらない。」⁵⁾と述べ、ブラキストンの批判により省略版が出されることになったという見解を示した。金坂清則もこの問題に関して「省略本が出たのは、出版社ジョン・マレーが、T・W・ブラキストン

からのクレームと廉価な省略本を出す意義を考慮した結果である。大部な書物を同社から出し、蝦夷・アイヌ民族にも詳しい人物からの、バードの記述に不正確な点があるとの指摘を無視できなかった一方で、廉価本の出版による一層の販売促進を狙ったのである。」⁶⁾と述べ長谷川の説を支持している。また、楠家重敏はケプロンの批判をあげた後に、「ブラキストン (T. W. Blakiston) も『蝦夷地の中の日本』で、彼女の初版での蝦夷やアイヌの記述の不正確さを批判している。そのため、バードは普及版ではかかる部分を削除している。」⁷⁾と同様の見解を示している。

他方では、上記三氏に共通する見解はこれだけではなく、ブラキストンの没後の1900年に、初版(1880)を復活させた版(1巻本であるが完全に2巻本の内容)をロンドンのジョージ・ニューズ (George Newnes) 社から刊行したことをもって、彼女の意思は初版の2巻本にあったことも指摘しているのである⁸⁾。

しかし、これまで、ブラキストンやケプロンの指摘箇所とイザベラ・バードの記述を本格的に比較検討した研究はなく、その指摘がいかなるもので、それに対して彼女がいかに対応したのかの精査はなされていない。本稿では彼らの指摘部分と彼女の記述を比較して、省略版の削除が彼らの批判とどのように関わるのかを検討する。さらに削除の結果として彼女の日本旅行記の性格がどのように変わったかについて考察する。この削除の問題は、イザベラ・バードの日本理解と彼女の思想を解明する上で見過ごすことの出来ない問題を含んでいると考えられるのである。

1. 問題の所在

イザベラ・バードの日本旅行記*Unbeaten Tracks in Japan*の初版から5年後に出た削除版はブラキストンやケプロンなどの批判に対応したものだ、というのがこれまでの研究者の見解であったことは前述した。また彼女の本意は初版本にあったことも指摘されてきた。しかし、彼女がこれらの批判を不当と感じ、かつ意思がそこまではっきりしていたのならば、出版者ジョン・マレー3世の意思が働いたにせよ彼女がなぜ省略版に同意したのであろうかという疑問が残ることになる。

楠家重敏は、ジョン・マレー社の倉庫でイザベラからジョン・マレー3世に宛てた手紙を発見したと次のように記している。「一八七九(明治十二)年十月二十四日付けのバードの手紙には、以前売り出した『ロッキー山脈紀行』の格安版のようなものを日本滞在記の場合にも出したい、とある。」⁹⁾この手紙文から分かることは、第一に、彼女には日本旅行記の初版の刊行以前から廉価版を作る意思があったということだ。とするとブラキストンらの異議申し立てとは関係なく、本を普及させるために削除がなされたのではないかということになる。

第二に、イザベラ・バードの著作における削除版はこれがはじめてではないということだ。実は、彼女が執筆活動をはじめた20歳代から、多くの人に読んでもらうための簡易化はなされていた。1859年に彼女が『アメリカの宗教』¹⁰⁾についての本を出版した時に、「論文を改訂して、宗教的な世界だけにかかわる読者でなく、その主題により熟知する可能性の少ないような読者に合うように作り変えることを申し出ていた。」¹¹⁾また、日本旅行記の出版以前には、『サンドイッチ諸島の6ヶ月(ハワイ紀行)』(ジョン・マレー社、1875年)もまた「少し省略してより安価で、統計を現在(1876年)にあわせた」¹²⁾改訂がなされた。つまり日本旅行記の省略新版は彼女の著作では特殊なことではなく、販売促進を狙うマレー社の方針と彼女の多くの人に読んで欲しいという意思によるものであったといえる。

日本旅行記の削除について、友人で彼女の伝記作家であるストッダートは次のように記している。「彼女は休暇中だというのに、『日本の未踏路(*Unbeaten Tracks in Japan*)』を、マレー氏が準備するように頼んでいた新版のために、統計を取り去り、旅行と冒険の本として作り圧縮1巻本にするために忙しかった。」¹³⁾ここには、「統計を削除」することと「旅行と冒険の本」にするという意図

が明らかにされている。

ここで削除の方針と目的は明らかになった。ただし、この削除にあたって彼らの批判をどのくらい尊重したかという問題が解消されたというわけではない。そこでイザベラ・バードが何を削除して、何を残したかをブラキストンやケプロンの批判をもとに検討するが、彼らの具体的指摘は北海道部分といくぶんの東北部分についてであることから、比較検討は東北・北海道部分に限定される。特にブラキストンについては、彼が*Japan in Yezo*において具体的に指摘した*Unbeaten Tracks in Japan*の箇所のすべてを取り上げる。

2. 削除の概要

*Unbeaten Tracks in Japan*の1880年の初版と1885年の省略版の大きく異なる点は、彼女がアーネスト・サトウ、F.V.ディキンズら、当時の英国人日本研究者とサー・ハリー・パークス駐日英公使の協力により書き上げた覚書の全て（新潟伝道、食品と調理、蝦夷、東京、伊勢神宮のそれぞれに関する覚書）と「序章」、「日本の一般事項」を削除したことである。いずれも日本の概説にあたるものであるが、*Unbeaten Tracks in Japan*を冒険旅行記に仕上げるための統計を削除するという仕事の一環でもあった。日本の近代化とキリスト教拠点の観察を中心とした関西旅行の全ても削除された。開市である東京と開港場で外国人居留地である新潟および函館の記述は、ほとんどが削除された。これにより彼女が日本で出会った日本人と欧米人の両方のキリスト教伝道に従事していた人々の名前は消えた。また当時の教育、医療、地方統治、養蚕や製糸工場といった日本の近代化の進捗状況も消えて古い日本の農村の姿が残された。なおこれらの削除の全項目を拙著『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』の対照表¹⁴⁾に示したので参照されたい。

3. ケプロンのイザベラ・バード批判

日本の研究者の間では、イザベラ・バードの日本旅行記の省略版の背景にはブラキストンやケプロンの批判があり、削除は主としてブラキストンへの対応¹⁵⁾と言われてきたが、何を問題として彼らはそんなにも手厳しい批判をしているのだろうか。

まずケプロンの批判をここに示そう。ケプロンの在日期間は1871（明治4）年から1875（明治8）年であるから、彼が*Unbeaten Tracks in Japan*を目にしたのは米国へ帰国後である。以下に示すケプロンの引用は全て『ケプロン日誌 蝦夷と江戸（Journal of Horace Capron Expedition to Japan 1871-1875）』（ホーレス・ケプロン著、西島照男訳、北海道新聞社、1985年）によるものであり、よって引用箇所は同書のページ数のみで示した。

ケプロンの記述

①「さて、次はイサベル・L・バード夫人である。農業やその他に広い経験を持つと言われ、“一跨ぎ七リーグの靴”（注）で北海道の島を見物して歩く。噴火湾をぐるりと廻り、海岸を二、三リーグ歩く。何週間か気候を調べ、シベリアの気候⁷⁾と明言し、だから島の植民は幻想で、日本人の努力はすべて無益であると主張する。同時に、素晴らしい景色や、まるで亜熱帯のような植物や、根元から四フィートの所で周囲が三十フィート以上もある木の茂る暗い林を見て夢中になる。

未開のアイヌにすっかり目を奪われ、蝦夷の大きな熊としつこいノミに驚き、海上や陸上の危機を危うく逃れる。危険な山道を行き、急な坂を登り下りすると馬はいつも引っ繰り返り、背中の荷物に引っ張られ、下の方へ真っ逆さまに落ちて死んでしまう。いつも荷馬の列が通ってひど

くなった蝦夷の“人の通わぬ道”は、万事彼女の本をフィクションで埋め、将来の史実を作るのに役立っている^④。世界をさっと歩いて、このような情報を歴史に加える人の一般像は、『人の通わぬ道』の第一章の、次のような話から推測できるだろう。」

原注：“一跨ぎ七リーグの靴”＝童話“親指太郎”の中に出る人食い鬼がはく。七リーグは約三十三キロ。（下線部引用者）（p.336）

ケプロンはこの文章に続けて、*Unbeaten Tracks in Japan*の初版の序章（Introductory Chapter）中の記述を1ページあまり引用している¹⁶⁾。序章2節目冒頭の「ココヤシとカカオの木はまったく別のものだ」という事実を「教育ある英国人」にわかってもらうのに、すぐれた作家でさえ二度、三度と繰り返し書く必要があるかもしれない。」というイザベラの記述についても、ケプロンは教育を受けた人で「ココヤシとカカオ」の区別の付かない人などいるはずもないとにべもないが、それに続く「シベリアの冬ほどにもなる日本最北の地…」という記述を最も問題にしている（引用①下線部⑦）。気候に関しては*Unbeaten Tracks in Japan*の「蝦夷に関する覚書」の冒頭にも次のように記されている。

イザベラ・バードの記述

「その最北端は、[イギリスの] ランズエンドより相当南方にある。蝦夷は、気候がとても厳しく、降雪量も多く、北部地方ではシベリアの冬の寒さである。」（下線部引用者）（『バード 日本紀行』、p.91）

これに対するケプロンの批判は次のようなものである。

②「バード夫人^{ママ}は、日本に関するその著書『人の通わぬ道（*Unbeaten Tracks in Japan*）』を、蝦夷はシベリアの気候で、という決まり文句で始めている。これは、東京か横浜に何年か住むとか、あるいは世界旅行の途中ちょっと立ち寄って日本帝国を見物し、本を書いたりアジア協会で話をするための材料を集める、英国人一般の繰り返す言葉に過ぎない。男であろうが、女であろうが、この気候を不動の事実として受け取っている。なぜならば、ハリー・パークス卿とアジア協会が、このように公表したからである。そして、いったんこう記録されると、人はいつもこの仮説に固執する。」（下線部引用者）（p.353）

ところで、上記のケプロンの「将来の史実を作るのに役立っている」（引用①下線部④）という*Unbeaten Tracks in Japan*に対する予言は当たったのだろうか。結論をいうならば彼の予言はあたったというべきだろう。その前にある「フィクションで埋め」という問題は別にして、100年以上の年月を経た現在、少なくとも明治11年の記述として、彼女の通った道筋の市町村史に彼女の記述が掲載されていることは事実である¹⁷⁾。

そして、「馬はいつも引っ繰り返り」と述べられている点をイザベラのために弁護するならば、南北戦争を戦った屈強なケプロン将軍とおよそ151センチの小柄で体力のない47歳の女性とが同じ道を騎馬で行ったとしても同じ結果を招くことないだろうと考えられる。当時の最先進国であった大英帝国から来た彼女にとっていくつもの峠を越える道筋を選択したこともあって東北や蝦夷の道路は、彼女の想像を絶するほどにひどかったと考えられる。特に東北旅行は梅雨期にあたり、30年に一度という大雨に遭遇していることから、山道や川で度々の難儀にあったのも事実であろう¹⁸⁾。

ケプロンの気候に関する指摘箇所はすべて序章と覚書にあり、よって削除されている。ケプロンの引用①で批判している二節目「未開のアイヌにすっかり目を奪われ」以下に対応する部分には、削除も変更も見られない。

4. ブラキストンのイザベラ・バード批判

次にブラキストンのイザベラ・バードに対する批判箇所を挙げる。ブラキストンの引用のページはすべてトーマス・W・ブラキストン著(1883)『蝦夷地の中の日本』(高倉新一郎校訂、近藤唯一訳、八木書店、1978年)によるものである。また同書に収録されている彌永芳子著(1978)「付篇トーマス・W・ブラキストン伝」は彌永(1978)と表示した。なお、引用文中の〈…原文同〉は、*Unbeaten Tracks in Japan*の原文の同じ箇所の邦文(文末注1)のページを引用者が示したものである。

ブラキストンの記述

①「噴火湾北東部のルートが利用されなくなった現在でも、このルートを行けば天国へ運ばれるなどとお世辞めいたことを書くようでは、現代の旅行者に対して不誠実だったと言いたい(バード女史の『日本における前人未踏の地』の中の「^{パラダイス}天上の樂園」の章を参照のこと)。私が初めてそこを旅行した時には、天国の方向へ歩いていなければ天国の門すら見えず、逆に蝦夷で最悪かつ最もいまわしい道路の一つとして、非常な苦勞を——十一月末のことだが——体験したのである。それ以後も、その時より良い天候で、もっと旅に適した季節に、同じ土地を回ったが、依然として天国に近づくような気はしなかった。実際、私の身辺で言われていることをすべて信用するならば、天国なんて恐らくとんでもない遠方にあるということになるだろう。」(p.338)

②「虻田は、バード女史のいう“天上の樂園”の門に当たることを私が推定と考えなければならぬ。というのは、噴火湾のいちばん奥を回るために、虻田を出ると間もなく川を渡し舟で渡り、それからすぐ^{レフンゲ}礼文華の山地に入ることになるからである。すでに述べたように、ここを私が最初に旅行したのは十一月下旬のことであった。」(p.354原文ママ)

上記②は①の記述の場所が虻田というところで、それならば、そこは天国へと続くような場所ではないことを確認しているのである。後者の文の後にブラキストン自身の同じ場所の体験が続けられている。イザベラが虻田でParadise¹⁹⁾という言葉を使った次の文に対する批判である。

イザベラ・バードの記述

「ああ、しかしなんとすばらしかったことか！まことに壮大な景色であった。これこそ本当に天国である。ここにはあらゆるものがある——すばらしい森林におおわれた巨大な岬、小さくて深い入江には大きな緑色の波が雄大にうねっている」(下線部引用者、『日本奥地紀行』、p.486)

イザベラ・バードはこの箇所(噴火湾にて、9月6日[初版 第45信、省略版 第40信])を省略版で削除していない。人の通らぬ馬道で、最初の峠で一頭の馬は駄目になってしまい、深い森林の中をものすごい急峻な坂を登り、頭上の絡み合う蔓草を避ける為に頭を下げて通り、躓いたり、転んだりする道。胸の高さまである岩畳では、前を行くアイヌ人の馬が後ろざまに倒れ彼女の馬を倒しそうになり、その結果彼女の荷物である寝台に足首をぶつけ切れて傷がつき、彼女は鞍から叩き落とされた。そして眼下の広大な景色、原生林に覆われた山々の冒険につきものの危険とその果ての神秘的な美しさ、これこそ彼女の最も求めたものであり、彼女にとっての^{パラダイス}樂園である。こんなすてきな冒険を彼女は削除するはずもなく、彼女の樂園を譲るはずもない。ブラキストンや他の人々にとっての困難は、彼女にとっての天国への道と考えられるのである。この同じ信書の中で、彼女はブラキストンに会えなかったと、彼の名前を出して次のように記している。

「私は^{ハコダテ}函館で、北海道の海岸を全部歩いてまわったというブラキストン大尉(英国軍人・動物

学者)に会うことができなかったので、この沿岸コースについて私の知りえた知識は……」(『日本奥地紀行』、pp.471-2)

彼女がブラキストンを全く無視したのではないことはこの記述からも分かるのであるが、彼は彼女の動植物に関する覚書に対して、特に厳しい批判をしている²⁰⁾。『蝦夷地の中の日本』におけるブラキストンのイザベラ・バードに対する批判箇所は次の通りである。

(1) 鳥類について

ブラキストンの記述

「キジは——バード女史は蝦夷にいと断定しているが——いないのである。エゾライチョウ(学名 *Tetrastes bonasia*²¹⁾)は食用になること以外、キジの代わりになる代物ではない。」(p.265)

イザベラ・バードの記述

「森林では鹿の姿も見たし、雉もたくさんいた。うまい具合に漁師がりっぱな牡鹿を一頭仕止めて持って来たので、私は夕食に鹿肉のステーキを食べ、たいそう楽しい気持ちになった。」²²⁾(下線部引用者、『日本奥地紀行』、p.461)

ブラキストンは「ブラキストン・ライン」²³⁾でその名を知られている鳥類の研究家である。彼女が記したように北海道に^{キジ}雉がいるとすると、彼の仮説(ブラキストン・ライン)が崩壊してしまう重要な問題点であり、彼にとって看過できない点である。ここは明らかに彼女の間違いであるが、彼女は削除も変更もしていない。

(2) 土壌と農業について

ブラキストンの記述

①-1「蝦夷の土壌について『二十年間は肥料をやることもなく、アメリカにおける例同様作物の生産に適している』と語った『日本における前人未踏の地』の作者〔バード女史〕を私たちは明らかに知っている——楽し気に作者のあらを探さなければならないことは残念な気はするけれども。彼女がこの不正確な情報を取り上げた場所はどこだと言うのか、私は発見できないのである。」(p.341)

①-2「したがって、私たちは旅行記の通俗書に見られるような、例えば『アメリカにおけると同じように二十年間は肥料を施すことなく、作物の生産に適している』と述べている文章などに引き込まれてはならない。

バード女史やそれに類する程度の筆着たちは、こうした問題についてえらく物わकारのよい意見を述べているが、彼らが何に基づいてそう言っているのかを見つけることはむずかしい。しかしながら、この問題に注意を集中してきた人びと——先の入植計画委員会によって農業・園芸部門に雇用された専門家たち——に彼らが相談をしたことがなかったことは確かである。なぜなら、これら専門家の経験してきた限りでは、土壌の中に、もともと豊かであるべき固有の成分が一般に不足している、という結果が示されているからである。」(p.390)

②「蝦夷のことを包括的に語るバード女史の先導——それは多くの旅行者に共通する誤りであり、また決して、日本に数週間来日している人たちだけとは限らない——に従って、私たちには蝦夷の土壌の生産性に関しきわめて好意的な意見を示すことはまったくできない。この見解を支えるため、私たちは、蝦夷地の地質学的な特徴に関する証拠を握っているのである。それは、土地の

多くが比較的新しく、かつ火山性であるため、肥沃な表層腐植土の要素が欠けているということである。」(p.391)

③-1 「なお、ここに“数百万エーカー”あり——バード女史のいわゆる“たっぷり灌漑された草地”、札幌と石狩川の間の大きな沼地も含めて——、それが耕作されるようになることが可能であるだけでなく、蝦夷の多くの土地は、南の日本の土地より恐らく遥かにすぐれているだろうという意見について、私は議論をする気はない。」(p.392)

③-2 「もちろん、この面積のなかには、幾つかの大きな沼地——バード女史の書いた『前人未踏の地』にある『たっぷり灌漑された草地』に相当するもの——も含まれているし、そのほか、農業の目的には不適当な土地もたくさんある。それでも、この溪谷は蝦夷のうち飛び抜けて豊かな土地なのである。」(p.394)

③-3 「一面、春の洪水の時期には、この地方の大概の場所は舟で実際行けるということから、どんな疑り深い人でも、札幌の西の山並みの円山と呼ばれる小山から見えるという例の“たっぷり灌漑された草地”や、“広大な草原”の眼前に展開する現実的な価値を必ずや認めるにちがいない。」(p.395)

イザベラ・バードの記述

①「島(蝦夷)は大部分が山で、平野はよく草が生え、水で潤っている。」(『バード 日本紀行』、p.91)
注：() は引用者、原文は ‘The island is a mountain mass, with plains well grassed and watered.’ で下線部が問題にされている。

②「土壌はたいがい豊かで、夏の暖かさがほとんどの穀物や根菜類の成長に好都合である。気候はイネによく適しているわけではないが、小麦はどこでもよく実る。本州の北部で育つ作物のほとんどは蝦夷でも生育する。イギリスの果樹類は日本のほかのどこよりもよく育つ。私は火山湾〔内浦湾〕の紋別ほどの見事な作物を見たことがなかった。伐採された土地は、野菜の腐敗で土壌が豊かになり、アメリカのように肥料なしで二十年間作物を産出するのに向いている。また、イギリスのように定期的に十分雨が降るので、灌漑の必要はない。」(下線部引用者、「蝦夷に関する覚書」『バード 日本紀行』、p.92)

③「札幌の近くには、いくつかの農業開拓地がある。この島のそこかしこでの実地試験でも、冬は長く厳しいが、気候や土壌は、冬小麦、トウモロコシ、雑穀、ソバ、ジャガイモ、エンドウ、インゲンマメやその他の野菜や穀物に特に好都合であることが証明されている。繊維の長さ、細かさ、柔らかさのゆえに、高い値で売れる日本の麻と同様にである。石狩川沿いにある札幌の近隣の、何千エーカーもの水はけのよい牧草地がまったく無汰になっている。」(『バード 日本紀行』、p.99)

ブラキストンは ‘with plains well grassed and watered’ 「たっぷり灌漑された草地」(③-1～3)について再三にわたり言及している。ブラキストンの記述③-3はこの言葉に対する強烈な皮肉である。ブラキストンにとっては蝦夷地の平野は決して「たっぷり灌漑された草地」などではないということなのだろう。ここではこれに関する真偽は問わない。

これら土壌や農業に関する部分への言及は、いずれも *Unbeaten Tracks in Japan* の「蝦夷に関する覚書」の中の記述に対するものである。本稿「削除の概要」で先に示したように彼女は全ての覚

書を削除しているので、批判部分は省略版には見られない。

それにしても、彼女の北海道の農業に関する意見の的確さに驚くのである。彼女の挙げた農産物はジャガイモ、小麦、トウモロコシ、根菜類などいずれも現在の北海道の特産品ばかりである。彼女の灌漑に対する関心は、東北旅行の随所に見られるが、これは彼女の父の実地教育の成果とその後のスコットランドの高地地方の農業の惨状から農民を救うためにカナダ移民を支援した事実からも通り一遍でない関心を彼女が持っていたと思われる。

(3) 植物について

ブラキストンの記述

①「このバード女史が植物学に関する彼女の記述のうちなにがしかを修正するでもなく、私がその修正箇所を見付けているのでもないのである。チャールズ・メアリーズ氏は、女史のこのような植物学上の情報をかなり多く採用した人であるが、蝦夷における『ケヤキ』も『イチョウ』の木に関しても決して明らかに確認していない。しかしながら、イチョウの科学的な名称が見事な筆致で著書に巧く書かれているのである。すなわち、私たちが今この章で話題にしている道筋でも、女史がイチョウの木に関して私たちへ提示していることは次のようになるわけである。『丈が高くて幹の周りが太い樹々、特に小さな扇形の葉をつけており、美しい*Salisburia adiantifolia* (イチョウ) は皆うるさそうなつるが巻きついている。』〈『日本奥地紀行』、p.486-最後の行～p.487-1行目と原文同、() 内引用者〉

さらに、そのあとに続く数ページのうちに次のように述べ、再びイチョウに特別の注意を引いている。

『私は*Salisburia adiantifolia*大きな見本になるような木のある所へやって来た。この木は地上三フィートの高さのところで八本の太い枝に分かれ、そのどれを見ても直径二フィート五インチを下らない。この木は成長がわが国の気候に大変うまく適応するので、あのキュー王立植物園〔ロンドン〕のごとくだれでも見られるようになるかもしれないのに、なぜこれまで大々的に紹介されていなかったのか不思議なくらいである。』〈『日本奥地紀行』、p.492-8行目～13行目と原文同〉

バード女史は明らかに、植物学的に用いられる物のことに関しては論外であった。ここに名を挙げられた木は——形^ノの点についてこそ彼女は正しいが——間違いなく蝦夷でごくふつうに見かける“カツラ”という名^ノの木であった。それは数年前に、ルイス・ポーマー氏によってアメリカ合衆国に紹介され、また、彼によって*Cercidiphyllum Japonicum*という学名が付けられたものである。(pp.341-2)

②「同様にあの『前人未踏の地』の中に*Ailanthus glandulosus* (柏) として扱われている別の木もあるが、あまりに特別なので、蝦夷でふつう見かける広い葉のカシワの木を特異なものとしたいかのような印象を私は受ける。実際、その印象は間違いないだろう。なぜなら、筆者(バード女史)は南東海岸のムカワ川〔鵠川〕を渡ったのち、『全く*Ailanthus Glandulosus*から成る森の中を』〈『日本奥地紀行』、p.370と原文同〉旅行したことを語り、また沙流川の谷において『森の木はほとんど*Ailanthus glandulosus*と*Zelkova Keyaki*だけである』〈『日本奥地紀行』、pp.374-5と原文同²⁴⁾〉と述べているからである。前者の森のある所はカシワの木が特に多い帯状の台地であり、後者の森のある所ではふつう見かけるニレの木が豊富である。このニレの木は植物学について少しでも知識のある人間なら、南方の“ケヤキ”は蝦夷には存在しないから、それと間違えることはありえない木である。また前者の例では、葉が『山繭に食われて、さんざん穴をあけられている』のが見られたと、これまた私たちは詳しく女史から教えられている。しかし私は、『植物学宝典』の中の*Ailanthus*の見出しを引いて、その葉が『桑の好物である』ことを知っている。

この二つの文が一致しているのにびっくりする。」((柏) 引用者、p.342)

③「しかしここで言いたいのは、『前人未踏の地』のほかの箇所でも同様だが、ラテン語の学名が不必要に羅列されていると思われることであり、あるいはまた、なぜ私たちはふつう見られるシダ類がPteris Aquilinaという学名で書かれているのを認めなければならないのか、なおStephanandra, flexuosa, Calystegia soldanella等々というような他の学名が並べたてられることも、ふつうの読者なら植物学辞典と首っ引きして参照しないかぎり、何が何だかさっぱりわからないのである。」(p.343)

注：引用文中の植物名のラテン語は、ブラキストン、イザベラ・バード共に原文はイタリック体。

上記①の文ではカツラをイチョウと誤ったことを指摘している。②はニレとケヤキの間違いと、北海道では一般的なカシワを彼女が特異なものとしたがっていて、それを山繭やままゆが喰うと記しているが山繭はいないという2点の誤りを指摘している。③は彼女が用いたラテン語が一般読者に分かりにくいこと²⁵⁾に対する批判である。いずれの指摘も動植物（特に鳥類）の分布を研究テーマとしたブラキストンにとって見逃すことの出来ない問題であった。

彼は彼女の日本旅行記に対して「旅行記の通俗書に見られるような」、「バード女史やそれに類する程度の筆者たち」(本稿p.81)と手厳しいが、それでもその程度の筆者たちの「通俗書」にあえて言及して批判を繰り返しているのは、彼にとって、彼女の日本旅行記*Unbeaten Tracks in Japan*は見過ごすことの出来ないものであったからだと思われる。

一方、イザベラ・バードにとってはどうであったかという、先の土壤に関する記述が載っていた「蝦夷に関する覚書」以外の削除は行っていないのである。しかも各地域の概論や制度の概論を記した覚書や事項の削除は全編を通して行っている。その上で彼女の冒険の背景となった森の景色はそのまま存在させている。この本の冒頭で自らこの旅行記を研究書でないと断っているイザベラにとって、その森の植生がカシワであろうとケヤキであろうとニレであろうと大きな問題ではなかった。彼女のペンは読者の前に危険と暗さと光を織り交ぜた手付かずの自然を、冒険の舞台として紡ぎだしたのだった。彼女のペンにはそのような力があり、彼女の感性には魔法をかける力が備わっていて、それが彼女の読者を惹き付け続けていると考えられるからである。

ここには、研究者としてのブラキストンの厳密な正確さを追求する姿勢と冒険旅行記の背景としての蝦夷を書いたイザベラ・バードの立場の違いがあったといえる。しかしながら、これはより正確で誠実であろうとした彼女の執筆姿勢を否定するものでないことも付け加えておこう。

(4) 札幌について

ブラキストンの記述

「しかし、支出が莫大であったとはいえ、札幌およびその周辺における政府の事業の大きさは、多くの人たちが想像するほど決して飛び抜けたものではない。いろいろな想像が、領事館や宣教師団の報告書などを書いた人たちの無能なせいで世間へ広められ、それがさらに、人気のある筆者によって歪められていったのである。

例えば、バード女史は札幌に全然いなかったにもかかわらず、その“広大な製材所”“大きな製粉場”や、さては“ワシントンの国会議事堂を模倣した道議事堂”について私たちに語っている。この最後の議事堂の話はまったく嘘であるばかりでなく、水力蒸気の力で運転される製材機はほんの少数あるにすぎず、あんまり少ないので、実はその機械にかけることができる木材の量以上に、豊平川トヨヒラ溪谷のかぎられた資源でさえ木材を供給しているのであって、製粉所に至ってはちっぽけなものにすぎない。」(p.409)

イザベラ・バードの記述

- ①「札幌には、大規模な製材所、絹工場、皮なめし工場、醸造工場があり、札幌と七重の両方に大きな製粉工場がある。」(『バード 日本紀行』、p.94「蝦夷に関する覚書」)
- ②「アメリカの提案は、ワシントンにある米国連邦議会議事堂を模倣した議事堂の付いた開拓使の事務所にまで及んでいる。」(『バード 日本紀行』、p.99「蝦夷に関する覚書」)

Unbeaten Tracks in Japan中の「覚書」はいずれも体験というよりは、聞き取りと資料・文献調査とっていいものである。イザベラ独特の活写して、描き出すような体験談とは全く異なったものである。ブラキストンの非難する製粉所や製材所についての記述は、実に素っ気無い簡単なものであり、ブラキストンの指摘するように何かに記されていたことの引用と思われる。一方のブラキストンから見れば、イザベラがなにげなく書いた製材所問題は彼にとって見過ごすことの出来ないものであった。ブラキストンは1864(元治元)年に日本最初の蒸気力を用いた機械製材所を函館ではじめた。その後、彼は明治10年から13年にかけて再三、原始林の豊富な石狩川流域に製材事業の移転、製材工場の買い上げを申請したが認められなかった。その理由は開拓使による開拓10ヵ年計画の一環としてアメリカから購入した蒸気・水車の木挽機械による工場建設に着手していたためということであった。工場移転、売買の申請が受け入れられなかった彼は1880年に製材工場を整理してこの事業から撤退した²⁶⁾。イザベラにとってはどうでもいいようなりップサービスに近い工場の話も彼にとっては事業の死活問題であり、腹の立つことであったのだ。

さらに、ブラキストンの彼女に対する批判は動植物にのみ関するものだけでなく、アイヌ人や蝦夷地における外国人社会に関わる部分も大変な不機嫌な調子で語られている。

(5) アイヌとの出会いについてのブラキストンの見解

ブラキストンの記述

- ①「酋長について語る場合、彼がバード女史の著『前人未踏の地』に出てくる「素晴らしい未開人」、すなわちベンリという人であることを注意しておかなければならない。ベンリ^{ベニリ}の家は中心村落の平取にあり、そこへはおそらく必ず外国人は招待されるはずである。これまでにデニング師、シーボルト氏、バード女史、バチェラー氏が相次いで滞在したが、特に最後に名を挙げた紳士は、これらの人びとと一緒に暮らす間にその言語を研究する目的を抱くようになり、長期にわたって滞在していた。」(p.250)

ブラキストンはイザベラのアイヌ人の家(ベンリ[ベンリウク]の家)逗留は特別ではなく「必ず招待される」ことを指摘している。この記述中に出てくるデニングとバチェラーは英国教会伝道教会(CMS)の宣教師である。このことからするとベンリ^{ベニリ}の家は外国人の宿泊所であり、聖公会(英国国教会)の人々の逗留所でもあった。イザベラはベンリというアイヌの酋長との出会いを次のように書いている。

イザベラ・バードの記述(ブラキストンの記述①に対応)

「少し前に、フォン・シーボルト氏とディースバッハ伯爵^{ビラトリ}が平取という私がこれから行こうとしているアイヌ村から馬を駆け足させて帰って来た。伯爵は馬からころげるように下りて私のところに駆け寄り、『蚤だよ、蚤!』と叫んだ。彼らはベンリ(ベンリウク)という酋長を連れて来た。彼は堂々としているが、遊蕩者らしい顔つきの未開人である。」(『日本奥地紀行』、p.371)

彼女の宿泊先となる酋長ベンリ²⁷⁾を連れて来たのは、フォン・シーボルト氏²⁸⁾とディースバッハ

伯爵ということになる。ただし、前述のように、彼女の函館での宿泊先であったデニングがこのペンリ宅に宿泊して伝道していた事実を考慮すると、彼女の宿泊先を紹介したのはデニングと考えられる。

次は海岸からその御神体を運んで祀ったといわれる義経寺についてのイザベラの記述に対するブラキストンの言及であるが、ここではイザベラの情報が最初のものであるかどうかということが問題となっている。問われているのは彼女の旅が「未踏」か否かなのである。

ブラキストンの記述

②「中心的村落たる平取のすぐ上流の川岸のそばに断崖があり、その断崖——さらに上流の谷がそこからよく見える——の上には義経の墓と呼ばれているものがある。それは四フィート半平方の小さな、日本のふつうの神社以上の何物でもなく、自国を追われたらしい武人に献納するためアイヌの何か古い建造物を取りかえて約十五年ほど前にそこ建てられ、アイヌの伝説として崇拜されているのである。一八七四〔明治七〕年当時、南東部海岸沿いに植物採集の旅をしていたルイス・ボーマー氏がここを訪れたことによって、その存在が最初に外国人の間へ知らされたのである。ところが、そのあと日本について本を書いた著者は、明らかにそれをちがったことのようにしたい気持を持っていた。というのは、その著者たる彼女〔バード女史〕が（第二巻の七一ページで）、なんと『私の立った所には、かつて一人のヨーロッパ人も立ったことはなかったので、一種の学問的厳粛さを感じた』（『日本奥地紀行』、p.400と原文同）と私たちに語っているからである。（下線部引用者、p.251-2）

ここでは、義経神社のある断崖に立ったヨーロッパ人は一人もいないと彼女がいうのに対してこの場所を欧米に最初に紹介したのはボーマ氏であるという指摘である。さらに「素晴らしい未開人」を引き合いに出しての批判はその他の箇所でも見られる。

③「たまたまある折、手をつかまえられた女がいて、腕にした入れ墨が見えるほど引っ張られたことがあった。その入れ墨を見てこれはいいと思ったので、アイヌ人は自分の女たちにもそれをやらせるようになったという。

この物語は、真偽は別にしてただそれだけのことのためにつくられたものであると思う。恐らくアイヌ人が、もとの起こりは自分らの知らなかったことでも自分たちの間で実施にうつされるようになった事柄を説明するために考え出した唯一の伝説であろう。この物語の信用できないのは、ミス・バードの書いた『素晴らしい未開人』の中の話が信用に値しないのと同じだろう。そのバード女史の話は、ピラトリ〔平取〕を訪れた観光客が、サル〔沙流郡〕のアイヌ人の老酋長²⁹⁾と一緒に大酒を飲むと、だれでも聞き出せるようなものである。」（傍点引用者、pp.97-8）

残念なのは、バチェラー氏が——『アイヌの語彙』ではなく——もっと『覚書』を私たちに提供してくれなかったことである。なぜならば、それは内容がきわめて豊富で、しかも長い間そのために労力を費やしたに違いないからである。彼は確かに——そして私たちも彼のさまざまな観察に重点をおくべきだったが——、アイヌ民族の習慣や独得の風習にきわめて深く分け入ったのであろう。ところが、彼は謙遜して次のように述べている。——『アイヌについてのミス・バードの意見は、恐らく英語でこれまでに書かれた最良のものであろう』と。彼のこの言葉は、その筆者の書いたものの一部に確認を与えるものとして、ある意味で申し分ないが、そのほかの部分のミス・バードの意見は蝦夷で大いに割り引きして評価されても仕方がないものである。（一八八二年八月五日付の『ジャパン・ガゼット』紙上の『日本に関する最近の文献』を見てほしい〔本書三四四-四六ページにその抜粋がある。〕）」（p.70）

ブラキストンは、彼女の話は「信用に値しない」、「だれでも聞き出せる」「大いに割り引きして評価されても仕方がない」と手厳しいが、それでもパッチェラーの「英語で書かれた最良のもの」というアイヌについての彼女の記述については一部であれ認めざるをえない一面があったことは、上記の文からも伺える³⁰⁾。

『英国教会伝道協会の歴史』には、「函館では、デニングが開港場の日本人だけではなく、アイヌを訪ねて奥地を旅することによって素晴らしい活動力を示した。この珍しい人々については、当時ほとんど何も知られていなかった。英国の読者が彼らについて知るようになったのはイザベラ・バード女史 (Miss Isabella Bird 現在はビショップ夫人) の旅行記によってであって、彼女の価値ある著書『日本奥地紀行』(Unbeaten Tracks in Japan) は一八八〇年に出版された。しかしこの写実的な著書によって与えられるアイヌに関する情報の大半は、『インテリジェンサー』に印刷されたデニングの手紙を通して、すでにCMS関係者の手に入っていたのである。」³¹⁾と述べられている。彼女のアイヌの記述は、欧米ではじめてではなかった。しかし、大衆に周知させたのは彼女の生き生きとした描写の結果であった。だからこそ、ブラキストンは彼女の本に対して寛大であることはできなかったと思われる。

(6) 外国人社会とブラキストン

まずブラキストンが函館の外国人社会をどのように見ていたかを彼自身の著書『蝦夷地の中の日本』(Japan in Yezo) の中に探そう。

ブラキストンの記述

①「健康に最適の気候風土は、肉体の面で病気にかからないことを保障してくれるものだが、精神は自分でつくり上げた心配事をあれこれ思いわずらい、おまけに他人の心配事までそれに付け加えるに違いない。後者のほうはスキャンダル〔醜聞〕を生み、初めの悩みのほうは暴飲につながる。一つの家族のように暮らすべき人びと——三万七千の本国人のど真中にいる二ダースほどの人間——が、犬や猫のようにお互いを敵視して、猫は猫でかたまり、犬は犬で集まって暮らしている。

領事連中のように襟に真鍮の飾りのついた高官服を着る者もいれば、宣教師連中のように黒いコートを着る人間もいる。もしも仕事がたくさんあったら、よく働く犬であるだろう者もいれば、もしも間違っただけで尻尾を踏まれなかったら、眠そうな温和しい猫であるだろう人間もいるのだが、現状はその逆で、前記のありさまである。

現在大変幅を利かしている伝道的な要素も、二十年前には宣教師は全然いないし、二人の領事しかいなかったころ、お互いがそっと交際していた外国人社会の状態を将来再び、つくり出してくれることを望もう。」³²⁾ (p.59)

彼は20年前の函館居留地の外国人社会が「一つ家族の人間以上の間柄」にあり、彼自身も「交際を楽しんだ」し、最高に親切なマナーで遇されて、心ゆくまで在留生活を享受した、と昔を懐かしむのであるが、そのような外国人社会は「外国貿易の減少に逆比例して一般に増大する教会と宣教師たちの居留地の、なんだかこれ見よがしの様子」(ブラキストンp.29) になったと、明らかに宣教師に対する不快感が示されている。他方で外国貿易の減少は彼自身の商売上の問題となっていた³³⁾。当時の函館の外国人社会への不満とイザベラ・バードへの批判がない交ぜになる形で、蝦夷地における彼女の情報源に関して次のように記している。

②「バード女史は、序言の中で次のように述べている。

『北部日本においては、他の情報源がすべて欠如しているため^㉞、私は一人の通訳を通じて、その

地方の人びと自身からあらゆることを知らねばならなかった。そしてあらゆる事実は、がらくたの山の中から掘り出さなければならなかった。』〈『日本奥地紀行』、p.18-19「はしがき」中の文と原文同〉

傍点は私が付けたのであるが、それはブリッジフォード大尉（現在は少佐）の「蝦夷の旅」（一八七三～四年発行、『日本アジア協会報』）の中で類似した一節がすでに提示されているからであり（一八八三年四月二十一日付『ジャパン・ガゼット』紙掲載の第十六章を参照のこと）、また開拓使発行の『開拓使顧問ホラシ・ケブロン報文』もあるので、彼女のいわゆる他に情報源がなかったわけではないのである。それでも私は、女史が函館について次のように述べることを避けるような良識を少しでも持ち合わせていたならば、その序言のことは大目に見る気持ちになったかもしれない。

『外国人は全部で三十七名だと言われている。行状や礼儀作法などの面に抵抗感があるため、社交的交際はほとんどなされていない^④。』〈『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』、p.133と原文同〉この中傷はだれを指して言ったのか、それを解く鍵を私たちにゆだねるのがこの天賦の才知に恵まれた女性筆者のやり口であって、彼女は次のように言う。

『某氏*（バード女史は名前を明らかにしているが、私は省くことにする^⑤）は、言語について特異な才があり、下層階級の人が話す日本の話し言葉を自由自在にこなす素晴らしい力を持っているばかりでなく、さらにそのうえ彼らの話す調子まで身につけている——（一三ページ参照のこと。『私が滞在している家の某氏』）。』（引用者注；一三ページは*Unbeaten Tracks in Japan*初版の第2巻の頁）〈『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』、p.135と原文同〉

『某国領事某氏**は、九年この地に居住している。また、昨日私が領事館で食事をした際、国籍の別なく、某氏夫人によって外国人たちに示された優雅で誠意あふれる歓待は云々。』〈『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』、p.134と原文同〉この文章からみて、当地におけるバード女史の情報源の所在は、いずれにせよ明白である。

日本全体のことを語るのは私の領分ではなく、私は蝦夷について書き、自らそれに限定しているつもりである。さりとて注意深い読者ならば、『前人未踏の地』の他の部分に、グリフィスその他の人からの“盗品”がたくさんあるのを見落とすことはないであろう。そのうえシェラード・オズボーンが、彼の『日本海域巡航』の中で、日本の帆船の帆について、強風に遭遇した際は帆柱の根元に帆を畳み込まずに、舷側から索を緩めて帆に受ける風の力を弱める、と創作したような誤りがそのまま残っている。…後略」（傍点ブラキストン、*引用者、下線部引用者、pp.343-4）

上記②でのブラキストンのイザベラに対する批判は次の3点である。

第一に、他にも情報源はあるのになどと記している点であるが、彼女はこの箇所の削除はしていない。第二に彼女が外国人社会に社交がないと記した文を問題にしているが、これこそ彼が許せない部分だというのである。第三に彼女が個人名を挙げたことを批判している³⁴⁾。

ブラキストンの挙げた某氏*は英国教会伝道協会宣教師のデニング氏、某国領事某氏**はユースデン英国領事で共に彼女の函館での滞在先であるが、彼らに対する彼女の記述は以下のように極めて好意的である。

イザベラ・バードの記述

「ユースデン英国領事は当地に9年間住んでいて、ユースデン夫人は心からの上品なもてなしは国籍に関わらず、外国人に示され、しばしば、軍港地の溢れんばかりのありきたりの歓楽より楽しい思い出を残す。」（『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』、p.134；*Unbeaten Tracks in Japan*, II, p.13）。

「デニング氏は彼の時間を割き、力の限り彼の仕事に、これ以上はないという気力と活力と情熱を持って、心血を注いでいます。」（前掲書、p.135）

個人名を挙げてのこれらの記述に問題があるようには見えないが、ブラキストンは函館の狭い外国人社会について社交がないかのような中傷をした犯人（情報の所在）として、領事夫妻、あるいはデニング氏を挙げているのである。彼が嘯み付いているのは「道徳上、行状上の問題がある」とされる人物は誰で、それを的中したのは一体誰なのかということであろう。イザベラはそれを解く鍵を函館在住の外国人社会に残していったというのであるが、行きずりの旅人である彼女が、異国における狭い外国人社会の何かを故国の人々に露呈してしまったというのだろうか。当時の人間関係を知る由もないが、ブラキストンの批判を通して、われわれは、本国と異なり様々な階層、職種のわずかな人々が緊密に関係して生きる居留地の外国人社会の一端を垣間見ていると考えられる。

ブラキストンは第二の函館の社交会云々の文章（②下線部④）の前に「女史が函館について次のように述べることを避けるような良識を少しでも持ち合わせていたならば、その序言（②下線部⑦）のことは大目に見る気持ちになったかもしれない。」と書いているので、この「道徳や行状」の問題がブラキストンの怒りをかったと考えざるをえない。これがなければ「見逃したかもしれない」ことで彼を怒らせたということは、この行状の主はブラキストン自身か彼に非常に近い人物を指すものと彼が思ったと推察できる。

事実ブラキストン自身には、思い当たる所があったのである。「トーマス・W・ブラキストン伝」のなかで彌永芳子は次の3つの事件を取り上げている。「ブラキストン雇用人縊死事件」、「ブラキストン商会証券の発行」、「外国人遊歩規定違反」である。

第一の事件は1873（明治6）年に起こった。盗みの嫌疑をかけられたブラキストンの雇用人（18歳）が押し込められた蔵で縊死して函館中の噂となった。ブラキストンは殺人罪で英国大裁判所（在上海）に告訴された。審議の結果自殺と判定されたが、使用人鞭撻の罪は免れないとして、5百ドルの過料を支払うことで事件は終わった。彌永（1979）はこの裁判で英国領事とブラキストンの間に微妙な影がさした。ブラキストンを殺人罪で訴えたのは、日本政府ではなく、実は英国領事が起訴したものであったことを知ったからであるという。さらに「ブラキストンは在留外国人はもとより、同国人とも余り交際をしなかったと言われるが、それが事実ならこの事件などもあるいはその一因をなしているかも知れない」³⁵⁾と述べている。

次の事件は翌1874（明治7）年に持ち上がった。ブラキストン社が函館・横浜・上海を航行し海産物の貿易拡大をするためにドイツのナウマン社に印刷を依頼した証券に端を発した。日本の外務書はこれを紙幣でも銀行証券でもなく郵船会社の資金調達のための株券と認識し差し止める権利はないとしたのに対して、大蔵省は大蔵省の発行する紙幣と同じ性質のものと解釈した。英国公使（ハリー・パークス卿）と協議の上、以下に示した1875（明治8）年8月25日の太政官布告により発行停止となった。

第百三十二号 大政官布告

先般函館在留英国人ブラキストン商社ニ於テ我政府ノ許可無之我国内通行文の証券製造致シ候趣ニ付右証券ハ取引致ス間數旨本月第百二十五号ヲ以布告候処今般我国在留英国公使へ右証券発行制停止儀話合ノ末同公使ヨリ函館港在留英国領事へ相達シ同商社ニ於テ既ニ発行之分共總テ引取相成候趣付此旨更ニ布告候事

明治八年八月廿五日

大政大臣 三条実美

最後の問題はブラキストンの在日期间を通して彼につきまといまわったと思われる。すなわち日米修好通商条約（1858年）で決められた「外国人の遊歩区域（自由に旅行できる範囲）は開港場から十里四方」という規定は、鳥類採集³⁶⁾を行っていたブラキストンにとっては、忌々しいものであったこ

とは間違いなく、彼はこの遊歩規定を破り区域外にでかけ度々問題となっている。そして間違いなく、この規定違反なしであの彼の名を冠した「ブラキストン・ライン」は生まれ得なかったのである。彌永（1979）によれば、「彼は乗馬と鉄砲が非常に巧みであったから、遊歩区域内はもちろんのこと、官用で区域外を旅行する機会も利用して鳥類採集を行なった。それが時には許可なくして遊歩区域外に出掛けるようになり、たびたび物議をかもしている。明治六年二月十日、古開丸に乗船して青森まで無断渡航したため、当時の英国領事ゼームス・ツループは開拓使から抗議されているが、翌七年五月二十八日、再び規程を犯して山越内・遊楽部まで行き、同所に六月八日まで滞在したことが、その出張官員から開拓使函館支庁へ届けられた。」(p.576)ということがあり、それに関わったのが英国領事アル・ユースデンである。このような状況の下で彼は自由に鳥類採集が出来ず、区域外の採集は福士成豊³⁷⁾の協力を仰がざるを得なかった。

ところが一方イザベラ・バードはというと、彼女はパークス英国公使を通して「事実上は無制限ともういうべき旅券」を手に入れているのである。旅券の申請は「健康、植物の調査、あるいは科学的調査研究」の理由によるものであった³⁸⁾。これがブラキストンの気にさわったとしても不思議ではない。彼から見てミス・バードは植物・動物・農業などの科学的調査研究者ではないということだろう。彼の指摘には明らかにこの動植物や農業などに関する部分が多い。イザベラは、「はしがき (Preface)」(*Unbeaten Tracks in Japan*には、PrefaceとIntroductory Chapterがある。)の二節目冒頭から「本書は日本研究書ではなく、単に日本旅行記にすぎないものであるが…」と書いている。彼女は研究書ではないと明言する一方では、他方ブラキストンの指摘するように、まるで学術書でもあるかのようにラテン語の植物名や統計が出てくる。この辺は彼女の旅券に問題があって、旅行記と言いながら学術的である一面を見せるというのは、彼女の旅券に記されていた「科学的調査研究」への対応であったと考えられる。

最後に、ブラキストンはグリフィスからの剽窃について問題にしている³⁹⁾。彼女の東北旅行の最後の地青森県碓ヶ関の記述中の子ども遊びについては、季節や、大雨による洪水の影響という状況や、地域に独自性を持つ風の様式などから考慮して、彼女はグリフィスに題材を借りて彼女の見た子どもの印象を記したと考えられる⁴⁰⁾。イザベラ・バードは、彼女の日本人観を示すために、グリフィスの子どもの遊びを題材として、行儀よく、年長者に従い、賢く工夫するおとなしくて従順な日本の子どもたち像を書いた。それらは、ブラキストンの盗品、剽窃という批判にもかかわらず、ほとんど削除することはなかった。彼女は確かにブラキストンの指摘する箇所の一部を省いているが、省かれたのは室内遊戯のカルタのみで、甲虫、風、竹馬、水車などの遊びはそのまま残した。彼の批判を考慮したとはいえないのである。

ところでこのブラキストンのイザベラへの強い批判は彼自身の問題である一面と、19世後半の「知」の環境の変化を見逃すことは出来ない。すなわち「19世紀前半の西欧で『知識一般』が、あるいはその一部が、『科学』に変質しはじめ、後半にはそれが決定的に進行した結果、ようやく『科学』という概念が成立する。」⁴¹⁾というような時代を考慮に入れるべきだろう。「科学」の概念が進行中で研究発表用の学術雑誌の草創期に何が起こっていたのかということである。『日本アジア協会紀要』『東京ドイツ東アジア協会報』などもそのようなジャーナルの一つであったとすると、*Unbeaten Tracks in Japan*の削除問題もまた表現された「科学」の使用はどうあるべきかという問題が提起されたと考えなければならない。事実このような問題を提起しているのはブラキストン一人というわけではない。ベルツもまた「私の論文は、一般にはあまり知られていない『東京ドイツ東アジア協会報』に掲載されたため、遺憾なことに、おおぜいの人があちこちから抜き出し、自分の著作として売り出すのに利用している」とシュトラッツやセレンカの『陽のあたる国々』を引き合いに出して非難している。特にセレンカについては「一言一句、しかも出典の明記もなしに、私の著書を写したものである。」と怒りを露わにしている⁴²⁾。一般にそのようなことが頻繁に行われており、まだ知的財産権が確立していなかった時代であった。

また、ブラキストンは「日本に関する最近の文献」⁴³⁾ (ジャパン・ガゼット紙、1882.8.5) においても、日本を旅行して紀行文などを書き残した（居住者ではない）人々に対して、「日本について書かれたあらゆる書物に見つかるはずの誤った記述」「二番煎じ」「この剽窃」「調査に値しない粗略きわまる研究の結果にすぎないもの」「単に豊かな想像力の所産にすぎない記述」「宣教師や領事の報告からの引用」等々異議申し立てをしているが、これらが明らかにイザベラ・バード批判であるのは、繰り返し彼女を名指していることから分かる。

5. 削除の方針と削除の結果

これまで見てきたように、イザベラ・バードの日本旅行記である*Unbeaten Tracks in Japan*の1885年の省略新版における削除は、ブラキストンやケプロンの批判箇所への対応に一貫性が見られない。

ブラキストンのイザベラ・バードへ批判を大別すると①動植物や土壌などに関する学術的問題、②外国人社会の記述など彼の個人的事情が背景にあると思われる批判、③グリフィス等の名前を挙げての剽窃に関わる問題の3点に分けられる。彼の指摘をこの3点に分けて、イザベラ・バードの指摘箇所への対応を表1にまとめた。

表1 ブラキストンのイザベラ・バードに対する指摘箇所とその対応（ページ数は本稿ページ）

ブラキストンの指摘箇所		イザベラ・バードの対応
① 学術問題	・鳥類（キジ）について（p.81）	そのまま
	・土壌と農業（灌漑）について（pp.81-2）	削除（「蝦夷に関する覚書」）
源 ② 社会・情報	・植物について（ケヤキ、カシワ）（p.83-4）	そのまま
	・学名のラテン語表記について（p.84）	そのまま
③ 剽窃	・札幌の製材所および建物について（p.84-5）	削除（「蝦夷に関する覚書」）
	・アイヌに関する記述とその情報源について（pp.85-6）	そのまま
③ 剽窃	・彼女の情報がはじめてかという点（pp.86-7）	そのまま（『日本奥地紀行』p.347、400）
	・函館の外国人社会について（pp.87-9）	削除（初版第38信、省略版第33信の部分）
③ 剽窃	・グリフィス等からの盗用との批判（pp.88,90）	凧、竹馬、水車、甲虫、キリギリスなどの遊びはそのまま、カルタのみを削除、迷信、諺などの説明部分を削除

1885年の省略版は、手紙文59信中の19信全文と信毎の一部、6つの覚書の全てと一つの一般事項、神道に関する覚書を含めた4つの付録にわたり、ページ数は初版の半分以下になった。この内、ブラキストンとケプロンの批判対象は「序章」、「蝦夷に関する覚書」と北海道からの18信と東北からの計20通である。表1に見られるように、批判箇所の削除と残された部分は半々であり、これら指摘箇所の削除は省略版の削除中の一割にも満たない。特に北海道部分は他の削除に比較して18信中10信に削除はなく、他もほぼ完全に残されているのが特徴である。

彼女は説明文や統計を削除するという当初の方針通り、まず「覚書」や「一般事項」そのものをそっくり削除した。ブラキストンやケプロンの批判は「蝦夷に関する覚書」の部分にかなり集中しているので、はからずも彼らの指摘箇所（上記①、②の問題を含む）が消える結果になった。しかし、信書形式の文中では、指摘箇所に該当しても、彼女の旅の背景として必要とされる風景や情景はそのまま残され、指摘されたラテン語の植物名や鳥類なども初版のままである。また明らかにグリフィスからの借用と見られる部分もそのまま残されている。

第二の削除は信書中にあった煙草や漆などの説明、諺、女大学、地方統治機構などの紹介である。

これらはジャパン・ガゼット紙（1882.8.5、本稿pp.86,90）における批判に当たる部分を含むと考えられるが、具体的批判を受けた箇所はなく批判への対応とはいえない。むしろ解説を削除することで、過剰を減らそうとしたハワイにおける削除と同質と考えられる⁴⁴⁾。

第三に信書の中から、キリスト教伝道拠点⁴⁵⁾、小学校と師範学校、病院、刑務所、紡績工場などへの訪問の記述、仏教とキリスト教関係者との出会いなど日本の近代化の進捗状況を表した箇所が削除された⁴⁶⁾。なお、これらに対するブラキストンの批判は全くない。

第四に外国人居留地の記述の多くが削除された。そこは「未踏路」とはいえないからである。これにより、ブラキストンの怒りをかった函館居留地の記述（上記②）も消えた。

これと対照的に、彼女にとって最も大事なアイヌの人々との生活と見聞は、批判箇所であっても削除も変更もなかった。

最後になるが前述のように2巻本の後半の関西旅行の全てを削除した。この部分は『*Unbeaten Tracks in Japan*（日本の未踏路）』という書名とも矛盾をきたすところでもあった。この書名は彼女自身が考えたのではなく、彼女の日本旅行に力を貸し、東北以北を自由に歩ける旅券を発行したハリー・パークス公使の命名である。初版はこの命名の前に出来ていて、未踏路と既踏路が記されていたが、省略新版にはまさにこの題名にふさわしく未踏路のみが残された。

これらの削除によって、彼女が日本で会った多くの人々の名前が消えてしまったことや彼女が日本の人々について感じたことや鋭い批判が消えたという問題は否めない。しかし、省略版は未開・野蛮などと連発する貶め^{おとし}の言葉にもかかわらず、彼女が「真実の日本」、「真の未踏の地」と述べている「蝦夷」でのアイヌ人との「すばらしい生活」が、その後半を飾り、近代化して行く日本の西部（神戸・大阪・京都）や居留地などの話と入りまじることなく題名にふさわしい「未踏の地」の紀行となったといえる。

ところでなぜこの削除問題が日本で持ち上がり議論されるようになったかという点、翻訳の問題と日本のブラキストン研究の過程で発見されたという特殊な事情がある⁴⁷⁾。ブラキストンの批判を見た長谷川（1984、文献5）は省略版を見たことによりこの削除に気がついたようである。日本でイザベラ・バードの日本旅行記として広く読まれてきた高梨健吉訳『日本奥地紀行』は省略版の訳であったが、初版の2巻本と比較して、東北・北海道に限定した旅行記としての魅力があった。また、楠家重敏らによって出版された削除部分訳『バード 日本紀行』は東京と関西の居留地を中心としたまさに1878（明治11）年時点での日本の近代化とキリスト教伝道の状況を著した全く別の読み物として、なんら違和感なく読むことが出来る。つまり両者がそれぞれ独立した本であるかのように感じるのである⁴⁸⁾。イザベラ・バードの省略版は初版のダイジェストというより全く独立した本としての魅力があり、旅行記として成功した新しい本とみなすことができる。だからこそ、イザベラ・バードはその死の直前になってこの旅行記とは別の日本研究書として初版の2巻本の内容を復活させたともいえるのである⁴⁹⁾。この復活の背景にある諸問題については別の機会に述べたい。

省略版を出版するという意味は、他者の批判によるものではなくて、初版出版以前からあった。イザベラ・バードは、大衆化を狙った廉価版を冒険と旅行の本にするというジョン・マレー社の企画に基づいて、省略箇所を決定した、というのが本論の結論である。

未知の事実を知ること、知らしめることこそ、他者・他文化の相互理解の第一歩であり、そこから人間の行動がはじまるという信念に基づいてなされた2巻本から1巻本への簡略化と焦点の絞込みは、出来るだけ多くの人々に読んでもらいたいというイザベラ・バードの意思とその生き方の問題でもあったのだが、この点に関しても今後の論文で明らかにしていきたい。

[注 & 文献]

- 1) *Unbeaten Tracks in Japan*の1800年の初版の邦訳の完訳は以下の3冊からなる。
 - a. 高梨健吉訳『日本奥地紀行』、平凡社、1973年。引用は平凡社ライブラリー、2000年版による。
 - b. 楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳『バード 日本紀行』、雄松堂出版、2002年。
 - c. 高畑美代子『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』、中央公論事業出版、2008年。なおこの3冊には重複部分がない。この内『日本奥地紀行』は1885年の省略新版、他2著が省略部分訳となる。以下*Unbeaten Tracks in Japan*の邦訳引用はそれぞれの書名を用いる。
他に時岡敬子訳『イザベラ・バード 日本紀行』上下、講談社学術文庫、2008年。
- 2) この版は初版（ジョン・マレー版）とは、副題と形式が異なる。
初版の副題はAN ACCOUNT OF TRAVELS IN THE INTERIOR INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE SHRINE OF NIKKO AND ISEであるがニューヨーク版はAN ACCOUNT OF TRAVELS ON HORSEBACK IN THE INTERIOR INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE SHRINE OF NIKKO AND ISÉ（蝦夷のアイヌと日光、伊勢神社訪問を含む馬に乗っての奥地旅行記）と下線部の騎馬の部分が付け加えられた。
また形式はロンドンのマレー版が手紙形式であるのに対して、ニューヨーク版は手紙番号がなく、それぞれに標題がつけられている。
- 3) 著者自身の手により1900年に初版の2巻本を復活したGeorge Newnes 版（London、1巻本）が出たが、広く読まれたのは省略版である。なお1997年にGanesha Publishing & Edition Synapse（Tokyo）から初版の復刻版がでるまで、イザベラの没後出版されたのはいずれも省略版に基づくものであった。
- 4) Blakiston, Thomas Wright, *JAPAN GAZETTE*, 1883年2-10月掲載、同年、同社より1冊にまとめて発行された。邦訳：高倉新一郎校訂、近藤唯一訳『蝦夷地の中の日本』、八木書店、1978年。
- 5) 長谷川誠一「二つの英人蝦夷旅行記 Thomas W. BlakistonとIsabella L. Bird」、『酪農学園大学紀要 第10巻 第2号』、p.471、1984年。
- 6) 「I・バードの日本の旅と旅行記をめぐって」（北海道新聞（夕刊）1999年12月6日）
- 7) 『バード 日本紀行』、p.358。
- 8) 楠家重敏は「しかし、彼（ブラキストン）の批判はバードにとっては不当と感じられ、一八九〇年（1900年の誤り）の新版では、初版に基づいて削除部分を復活させている」（『バード 日本紀行』、p.358）と述べている。
金坂清則は「この部分（アイヌについて）の記述についてブラキストンから批判されたことは二巻本を簡略化した本が出版される一つの契機となったと考えられるが、バード自身はこの二巻本にこだわり、このこともあって一九〇〇年には出版社を替えて新版を出版した。」（括弧内引用者）（『イザベラ・バード極東の旅』、平凡社東洋文庫、2005年、p.287）と述べ、長谷川（1984、文献5）も同様の見解を示している。
- 9) 『バード 日本紀行』、p.359。
- 10) *The Aspect of Religion in the United States of America*, London, Sampson Low, Son, and Co,
- 11) Stoddart, Anna・M *THE LIFE OF ISABELLA BIRD (MRS. BISHOP)*, London, John Murray, p.47, 1906。
- 12) *Ibid*, p.92。1876年4月のマレー氏からの提案として、記されている。
- 13) *Ibid*, p.168。
- 14) 文献1c、pp.13-21
- 15) 省略新版がブラキストンへの対応と言われるのは、省略版の出版年にケプロンが亡くなっていることや、ブラキストンの死後（1891年）の1900年にロンドンのGeorge Newnesから初版の内容を復活した版が出たことによる。
長谷川（文献5、p.476）は、この初版を復活させたことについて、「英国婦人の息の長い対処には感服した」と述べている。楠家も同様の見解を述べているので、本稿注5）を参照されたい。
- 16) 『バード 日本紀行』のp.18行目「ココヤシとカカオ…」からはじまる文からp.3-2行目まで。
この冒頭の「ココヤシとカカオの区別もつかない人」という文は、『イザベラ・バードのハワイ紀行（*The Hawaiian Archipelago: Six Months in Sandwich Islands*, John Murray, 1875）』（近藤純夫訳、平凡社、2005年）の序章（p.14）にもチャールズ・キングズベリーからの引用として同様の文がある。
- 17) 会津高田町、会津坂下町、金山町、六郷町、大館市、碓ヶ関村、黒石市など、イザベラ・バードの通った地域のほとんどの町村史に彼女の記述が引用されている。他に『青森県土木史』『子育ての書1』（平凡社東洋文庫）、『明治の音』（中公新書）などにも引用されている。
- 18) 明治十一年（1878）年の秋田県の農業災害年表には、「霖雨（七月下旬から五十日間）・（大雨（七月二十一日））」と記されている。^{ながあめ}
- 19) the Paradise はエデンを表し、天上の楽園に対して地上の楽園を意味する。イザベラ・バードはこれを冠詞をつけないでParadiseと表している。
- 20) これについては長谷川（1984、文献5）に英文原文が掲載されているので参考にされたい。
- 21) 鳥類および植物の学名は、ブラキストンとイザベラ・バードはどちらもイタリック体で記しているが、引用文献（文献4、邦訳）では、イタリック体を用いていないので、本稿では、文献4の引用の時は、訳文をそのまま引用した。なお本文中では、ブラキストンとイザベラ・バードに従って、イタリック体で表記した。

- 22) この部分の引用に関しては、査読者より、引用箇所^{の誤り}の指摘を受けて改めて全文を精査し直し、引用箇所を変更したものである。この点はブラキストンのイザベラ・バードへの批判の上で最も学術的で重要な問題点である。動物分布についてご教示くださった査読者に感謝いたします。
- 23) 動物分布上、津軽海峡を「ブラキストン・ライン」と呼ぶ。ブラキストンはその理由を地球の氷河期と温暖な時代との変動を理由とした。1880年の日本アジア協会紀要にはH. Pryerと共同で‘Catalogue of the Birds of Japan’ (pp.172-241) が発表されている。1883 (明治16) 年2月14日の日本アジア協会の例会 (座長ハリー・パークス卿) でブラキストンは、日本列島の動物は津軽海峡を境にして質的に異なっている。北海道には北方種のヒグマをはじめ、シマリス・エゾヤマドリ (エゾ雷鳥)・シマフクロ・ユヅアカガエル・シベリアオオカミなど、シベリア大陸系の動物が多い。これに対して本州にはキジ・ヤマドリ・カモシカ・イノシシ・トノサマガエルをはじめ、下北半島の端にまで住むサルが棲息するが、北海道には全くいない、という動物の分布の調査結果を発表した。この時、工部大学校の地震学者ジョン・ミルン (John Milne) によって、津軽海峡を「ブラキストン・ライン」と呼ぶことが提案された。(彌永 (1978) p.583を一部変更)
- 24) 「ほとんど柏と楡^{かしわ}だけである」、と訳されているが、イザベラ・バードは省略版に際して単語を変えていないので、原文ではケヤキとなる。また、「序章」では、日本の木の紹介にケヤキ (ニレ科) とカッコつきでニレ科であることが書かれているが、この部分は省略版にはない。
- 25) イザベラ・バードは、エディンバラの王立植物園で週6時間の講義をとり植物学の学習をしていたこと、またラテン語の賛美歌の英語訳をしている事実から見てラテン語を取り入れたのは自然であったと思われる。また今日われわれが彼女の記した植物名を邦訳するにあたってイタリックでラテン語表記されていることは、少なくとも彼女が何を記したか確定するには役立つことになった。
- 26) 彼の製材所については彌永芳子著「付篇 トーマス・W・ブラキストン伝」、『蝦夷地の中の日本』、八木書店、pp.483-6、pp.536-44、1978年を参照されたい。
- 27) このベンリという酋長は『英国教会伝道協会の歴史』(ユージン・ストック編、吉田弘、柳田裕訳、聖公会出版、2003年)の中で、「酔っぱらい酋長ベンリ (Penri)」(pp.74、93)として記されており、ミッシヨナリー・リポートを通じて英国国教会関係者に知られていたことが分かる。
『英国教会伝道協会の歴史』は*The History of the Church Missionary Its Environment, Its Men and Its Work*, 3Vols, 1899の抄訳。
- 28) オーストリア公使館勤務。
- 29) イザベラ・バードの宿泊先であった酋長ベンリ。
- 30) ところでここに引き合いに出されているパチェラー師についてもブラキストンは「私はパチェラー氏が書いた「アイヌについての覚書」(『日本アジア協会報』第十巻第二章)の中のアイヌ人の伝承には何らの価値も認めないが…」と記している。(ブラキストン、文献4、p.400)。
- 31) ユージン・ストック、文献27、pp.55-6。
- 32) ブラキストンは初期 (1860年代前半)の函館居留地を次のように回想している。「函館にいる外国人 (『外国人』とは極東ではヨーロッパ人とアメリカ人をひっくるめて呼ぶ名前になっている)の数は、私が訪れた当時、商人、領事連中、ローマカソリックの伝道師に若干の居住者も含めて、全部で二十名を超えず、そのうち女性が四人で、二人はロシア婦人であった。たいてい、ロシアの軍艦が一隻、港に停泊していたが、その士官たちはこの地の社交界に加わり、酔っぱらった水兵たちは、街の通りに出掛けることになっていた。
小さな共同体の内部では、当然国籍など問題でなくなるので、居留民たちは一つ家族の人間以上の間柄にあり、格式ばった招待や訪問というようなエチケットは無視されていた。なぜならば、裏切りやすく人を欺いてばかりいる人種に取り巻かれた他人同士であるという共通の感情によって、より開けっぴろげで心のこもった歓待が誘発されたからである。それに、皆お互い保護し合うために顔をあわせるようでもあった。
私は滞在中きわめて打ちとけて交際を楽しんだし、最高に親切なマナーで遇されて、心ゆくまで在留生活を享受した。火山や鉛の鉱山を歩き、その他の楽しい目的のために計画された数回のパーティのお供をしたが、それは、条約によって外国人が条約港からこの国内へ入り込むことが許される限界と定められた「十里」(約二十五マイル)内か、時々少しばかりこの限界を越えることもあった。」(ブラキストン、文献4、p.19)
- 33) 彌永 (1978) に「函館における外国商人の取引状態」(文献26、pp.492-7)、「ブラキストン・マル商会の衰退」(同書、pp.533-5)として当時の外国商人の進出状況が書かれているので参照されたい。
- 34) イザベラ・バードは人名の不記載理由について「ハリー・パークス卿は公人ですので、私は彼については書いていますが、ここで他の人々が私に示してくれた親切や、日本のことを見るための私の準備に便宜をはかり、多大なご迷惑をかけている方々についてはほのめかすくらいのことしか出来ないのです」(*Unbeaten Tracks in Japan*, (I), John Murray, p.23, 1880)と初版で記している。
- 35) 彌永 (1978)、文献26、p.531。
- 36) ブラキストンは1881 (明治14) 年に採集した324種、1338羽の鳥の標本を函館の開拓支庁に寄贈。(前掲書、p.582)
- 37) 福士成豊 (1838生まれ)「日本鳥類目録」の共同採集者と記載されている人物。新島襄のアメリカへの密航を手助けをしたことでも知られている。
- 38) 『日本奥地紀行』、p.69。

- 彼女はハリー・パークス公使からの旅券だけではなく、ユースデン函館領事が、他方、知事に働きかけて出させた、馬や人夫、乗物、宿、汽船の便宜を図り、さらにどこでも役人から援助を受けられるように書いた証文シヨウモンを持っていた。これにより、彼女の旅行はより自由で容易なものとなった。(証文については、『日本奥地紀行』p.347を参照されたい) これもまた、ブラキストンを激怒させる要因であったと思われるが、彼はこの点については言及していない。
- 39) イザベラ・バードのグリフィスの「子どもの遊戯」からの借用については拙著(共著)「イザベラ・バードの描いた碇ヶ関と子どもと遊び」-『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第1号、2005年に両者の対照表(pp.127-9)をつけたので参照されたい。
- 40) 前掲書、p.132。
山下英一訳『明治日本体験記 [William Elliot Griffis (1874) *The Mikado's Empire*, (II), New York: Harper & Brothers]』、平凡社、1984年と対照されたい。
- 41) 村上陽一郎『現代科学の名著』、中公新書、p.viii、1989年。
- 42) エルヴィン・ベルツ著、若林操子編訳『ベルツ日本文化論集』、東海大学出版会、2001年、p.379；
引用箇所は原題:Über japanisches Familienleben、1893年7月22日付「シュヴェービッシャー・クメール」紙(第169号)掲載、池上弘子訳。
- 43) ブラキストン、文献4、p.345-6。
- 44) ハワイについての削除についてストッダートは次のように記している。
「詳細と繰り返しの過剰は『イザベラ・バードのハワイ紀行』の輝きをいくらか霞ませてしまっているが、それは切り詰められて、いまや、判断はもはや足かせをはめられていず、心はより豊かに才に恵まれ、より少なく詮索的であり、偏見により損なわれることは少なくなり、精神はもはや紋切り型の型枠の内部で矮小化されることもなく、英知と理解が深まっている。」(Stoddart、文献11、p.108)。
- 45) 初版出版後の1882年頃に、デニングとCMSの間に信仰上の問題が持ち上がり、デニングは函館を離れている。やがて彼はこの問題からCMSを離れることになるのだが、イザベラとCMSの関係から見て彼女がデニングに関する蝦夷伝道の記述の多くを削除したのでないかと推測される。純粹に信仰上の問題であるこの点に関しては『英国教会伝道協会の歴史』(文献27、p.57)を参照されたい。イザベラ・バードのデニングに関する記述は拙著[2008](文献1c、p.135)。
- 46) 拙著(2006)「イザベラ・バードのUnbeaten Tracks in Japanにおける「未踏」の二重の意味」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第3号(平成18年12月)、pp.18-9を参照されたい。
- 47) 長谷川が見たTuttle版は省略版であるがこの版には省略版の表示はない(本稿p.76)。
1885年版が省略新版であることは省略新版第1版に明記されていたが、その後の版ではこの表示が削除されたために、英語版では、省略版を初版(1880)の重版と勘違いすることがある。拙著(2008、文献1c、p.12および前ページ)の省略版初版と3版の比較写真を参照されたい。なお、『日本奥地紀行』には、省略版を用いたことが明記されている。
- 48) 話題や地域の違う部分を切り離して2冊の本として作られたのは、ハワイとロッキー山脈の旅行記である。当初この両者を一冊の本にするというイザベラ・バードの案に対して、分けて別の本にすることを提案したのは、出版者のジョン・マレー3世であった。(Stoddart、文献11、p.81)
- 49) イザベラ・バード・ビショップは1900年に初版より大型の1巻本で初版からの削除部分を復活したものを出版した(本稿注15のGeorge Newnes版)。この時、副題をaccountからrecordへ変えた。